

第1回 『歎異抄』とは ～その魅力と概要について～

1. 『歎異抄』の評価

■日本で最も読まれている宗教書のひとつ

⇒ キリスト教では『聖書』、仏教では『歎異抄』

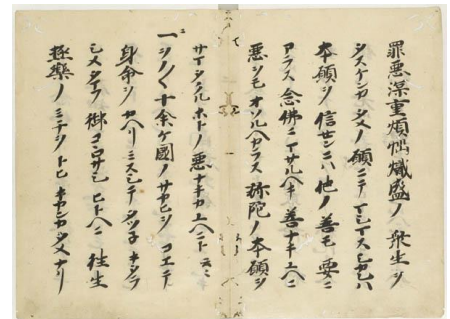
■『歎異抄』の関連書籍

龍谷大学図書館・・・550件以上

Amazon・・・1000件以上

⇒ 親鸞聖人、浄土真宗関係ではダントツの1位

現代の人が浄土真宗の教えに触れる窓口は、『歎異抄』と言っても過言ではない



■『歎異抄』に魅せられた人々

西田幾多郎（哲学者）、倉田百三（作家）、司馬遼太郎（小説家）、吉本隆明（詩人）、三國連太郎（俳優）、中村久子（作家）、亀井勝一郎（評論家）、遠藤周作（作家）、鈴木大拙（仏教学者）、梅原猛（哲学者）、井上清（作家）、五木寛之（作家）など



司馬遼太郎（1923 - 1996）

日本大衆文学の巨匠。『功名が辻』『翔ぶが如く』『徳川慶喜』『国盗り物語』『竜馬がゆく』『坂の上の雲』など、7作が大河ドラマの原作となっている。

「死んだらどうなるかが、わかりませんでした。人に聞いてもよくわかりません。仕方がないので本屋に行きまして、親鸞聖人の話を弟子がまとめた『歎異抄』を買いました。非常にわかりやすい文章で、読んでみると真実のにおいがするのですね。

人の話でも本を読んでも、空気が漏れているような感じがして、何かうそだなと思うことがあります。『歎異抄』にはそれがありませんでした。（中略）
兵隊となってからは肌見離さず持っていて、暇さえあれば読んでいました。

（司馬遼太郎『司馬遼太郎全講演第1巻』）

「無人島に一冊の本を持っていこうとしたら『歎異抄』だ」

（『週刊朝日』平成8年11月1日号）



梯 實圓（1927－2014）

浄土真宗本願寺派勸学・本願寺教学研究所元所長

さまざまな人がこの書を愛読してきました。作家の倉田百三、評論家の亀井勝一郎、哲学者の三木清など、大正から昭和にかけて活躍した有名、無名の多くの人びとがこの書によって人生の難関をこえていきました。あの激しい戦争の時代に、青春の夢も希望も絶たれて戦陣に向かった多くの青年たちが、背囊のなかに秘めていた心の書は『歎異抄』でした。そしていまも生と死の厳頭に立って心のよるべを失った人びとが、この書に光を求めています。人生に挫折し重い心の傷をうけた人が、安らぎをこの書のなかに見出した例はかぎりなくあります。この書をとおして親鸞聖人は、いまもなお悩める人びとの心のなかに生きつづけておられるのです。この書に記録された親鸞聖人の法語の多くは、聖人の晩年、おそらく八十歳を過ぎてからのもののようです。日常、若い門弟とのあいだにかわされた、なんの飾り気もない率直な対話のなかに、人間親鸞の息吹が伝わってきます。（『聖典セミナー 歎異抄』より）

2. 『歎異抄』の魅力

①、親鸞聖人の人柄が伝わる

・ 厳しい親鸞聖人

このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり…（第2条）

・ 温かい親鸞聖人

親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。（第9条）



积 徹宗（1961～）宗教学者、相愛大学学長

（聖人は）一方では妥協を拒否する実存哲学者のような面をもち、他方では相手を思いやり、共に真摯に仏道を歩むことを大切にし、時には一緒に泣き、時には一緒に歌い、時には一緒に笑うような人でもあったのです。このようなふり幅こそ、親鸞聖人の魅力なのだろうと思います。（『るるぶ』～親鸞ゆかりの地～）

②、逆説的な言葉の数々

【第3条】

善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。

善人でさえ浄土に往生することができるのです。まして悪人はいうまでもありません。

【第9条】

いそぎまゐりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じ候へ。

はやく往生したいという心のないわたしどものようなものを、阿弥陀仏はことのほかあわれに思ってくださいなのです。このようなわけであるからこそ、大いなる慈悲の心でおこされた本願はますますたのもしく、往生は間違いないと思います。

⇒ 宗教的逆説性（パラドックス）

一般的な常識をくつがえしながら、救われがたき存在を救う阿弥陀仏の大悲を知らせる言葉の数々。

③、美しい文章

【第1条】

弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつところのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

阿弥陀仏の誓願の不可思議なはたらきにお救いいただいて、必ず浄土に往生するのであると信じて、念仏を称えようという思いがおこるとき、ただちに阿弥陀仏は、その光明の中に摂め取って決して捨てないという利益をお与えくださるのです。

3、『歎異抄』はなぜ書かれたのか

親鸞聖人の生涯区分

- ①比叡山時代（9歳～29歳）
- ②吉水時代（29歳～35歳）
- ③越後時代（35歳～42歳）
- ④関東時代（42歳～62歳頃）
- ⑤京都時代（62歳頃～90歳）



親鸞聖人の布教により、関東には多くの門弟がいたが、聖人帰洛後、関東に誤った考え（異義）が出てきた。聖人は、手紙を送るなどして関東の門弟たちを指導するが、聖人が亡くなると、再び異義が出現しやすい状況が生まれていた。

『歎異抄』【前序】

先師（親鸞）の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思ふに…

【後序】

かなしきかなや、さいはひに念仏しながら、直に報土に生れずして、辺地に宿をとらんこと。一室の行者のなかに、信心異なることなからんために、なくな
く筆を染めてこれをしるす。なづけて『歎異抄』といふべし。

⇒ 親鸞聖人の信心とは異なる内容が伝えられていることを歎き（歎異）、他力の信心を伝えようと著された「信心の異なるを歎く書物」

■『歎異抄』の名前の由来

「歎」・・・なげく

「異」・・・ことなり ⇒ 親鸞聖人の教えと異なった理解

※「歎異」（異を歎く）書物であり、

「排異」（相手を糾弾して異を排す）書物ではない。

「抄」・・・ぬきだす ⇒ 親鸞聖人の言葉を抜き書きし、まことの信心の指標とする。

3、『歎異抄』の著者について

※『歎異抄』の原本は存在せず。本願寺第8代宗主・蓮如上人（1415-1499）による書写本が現存する最古であるが、そこには著者の署名がない。他の古写本にも書名なし。

■著者は誰か？

【前序】

故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留むるところいささかこれをしるす。

⇒『歎異抄』の著者は、親鸞聖人と直接会って教えを受けた直弟子

【中序】

そもそもかの御在生のむかし、おなじくこころざしをして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし…

思えばかつて、親鸞聖人がおいでになったころ、同じ志をもってはるかに遠い
京の都まで足を運び・・・

⇒ 親鸞聖人のご在世の時代を「むかし」と言える人物

⇒ 関東から京都へ上洛した人物

【後序】

露命わづかに枯草の身にかかりて候ふほどにこそ・・・

⇒ 『歎異抄』の執筆時、相当な歳になっている人物

☆著者の条件

- ①親鸞聖人の直弟子
- ②関東在住の門弟
- ③執筆時に相当な歳
- ④すぐれた学識

■唯円（1222-1289 頃）が定説

河和田（かわだ）の唯円

- ・親鸞聖人の直弟子（親鸞聖人門呂交名牒に記載）
- ・常陸の河和田（現在の茨城県水戸市）、報仏寺の開基
- ・親鸞聖人と唯円は49歳差

※同名の門弟「鳥喰（とりばみ）の唯円」と区別する為に「河和田の唯円」といわれる

○従覚上人『慕帰絵』

正応元年冬のころ、常陸国河和田唯円房と号せし法侶上洛しけるととき、・・・《中略》・・・かの唯円大徳は鸞聖人の面授なり、鴻才弁舌の名誉ありしかば・・・

正応元(1288)年冬の頃、常陸国河和田の唯円房という僧侶が上京しました・・・。
唯円大徳は、親鸞聖人の面授の門弟です。すぐれた学徳をそなえ、説法の名手だったので評判を得ていました。



■『歎異抄』本文に「唯円」の名前

【第9条】

親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。

この親鸞もなぜだろうかと思っていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ心持ちだったのですね。

【第13条】

またあるとき、「唯円房はわがいふことをば信ずるか」と、仰せの候ひしあひだ、「さん候ふ」と、申し候ひしかば…

またあるとき（親鸞）聖人が、「唯円房は私のいうことを信じるか」と、仰せになりました。そこで「はい、信じます」と申し上げると…

■本文中の敬語表現

著者から唯円への敬語（尊敬語）はなく、親鸞聖人への敬語（謙譲語）のみ。

「～と、申し入れて候ひしかば、（「～」とお尋ねしたところ）」

⇒ 著者から親鸞聖人への敬意あり、著者から唯円への敬意なし

歎異抄の著者について、古くは本願寺第2代宗主「如信上人説」、第3代「覚如上人説」などもあったが、**現在では「唯円説」が定説。**

■執筆時期

唯円晩年の執筆。親鸞聖人が往生した20年ほど経過し、唯円が60歳を過ぎた頃と推定。

4、『歎異抄』の構成

※全18条からなる和語の書物

- ①、序文（前序）・・・撰述の意図
- ②、親鸞聖人の語録（師訓編）・・・第1条～第10条
- ③、序文（中序）・・・
- ④、唯円の歎異（異義編）・・・第11条～第18条
- ⑤、序文（後序）・・・むすび
- 〈⑥、承元の法難の顛末・・・付録〉

■『歎異抄』の性格

- ・親鸞聖人の言葉を集めた「言行録」。
- ・親鸞聖人の滅後に広まった異義に対する、唯円の「歎異」

⇒ 親鸞聖人の言葉を基準・拠り所として、唯円が異義を歎異する

